



2003年度社会教育主事講習の概要と制度史的背景

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 門脇, 正俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9353

2003年度社会教育主事講習の概要と制度史的背景

1. 岩見沢校担当6回目の社会教育主事講習とその制度的位置・運営組織

岩見沢校が社会教育主事講習を最初に担当したのは1978（昭和53）年で、その後、83（昭和58）年、87（昭和62）年、93（平成5）年、97（平成9）年、2003（平成15）年に担当し、今年度が6回目の担当であった。筆者はその間、第1～3回は副主任講師、第4回は主任講師を拝命し、第5回は運営から外れたが「生涯学習概論」の講義の一部と「社会教育演習」の「青少年教育」グループを担当し、また今年度の主任講師を拝命したので、岩見沢校での6回の担当すべてに関わってきたことになる。

ところで社会教育主事とは、社会教育法第9条の2及び3の規定により、都道府県及び市町村の教育委員会事務局に配置され、社会教育を行うものに専門的技術的な助言や指導を与える専門的職員である。そして、社会教育主事講習は、「社会教育法第9条の5の規定及び社会教育主事講習規程に基づき実施するもので、社会教育主事となるべき者にその職務を遂行するのに必要な専門的知識、技能を習得させ、社会教育主事となりうる資格を付与することを目的とする」（募集要項）文部科学大臣の委嘱事業であり、北海道ブロックでは北海道教育大学が5キャンパス持ち回りで担当している。その講習実施のために、担当分校主事を委員長に、正副主任講師全員、文部科学省社会教育課長、北海道教育庁生涯学習課長、本学学務関係担当副学長、学務部長、教務課長、担当校事務長を運営委員とした「社会教育主事講習運営委員会」が大学本部に組織され、実施計画や受講生の決定及び修了認定等を行っているが、具体的な実施計画の作成や実施業務は担当校が、受講者の募集と候補者選定の業務は北海道教育庁が、それぞれ実質的に担当し、講習の前と後に1回ずつ開催される上記の運営委員会に提案し決定される仕組みになっている。今年の岩見沢校の場合、講習担当のために生涯教育課程担当教官全員（金谷、古村、安井、神谷、武田、百瀬、山本）と学校教員養成課程4系各1名（門脇、谷本、大森、長内）の11名と分校主事で構成された岩見沢校運営委員会が組織され、主任講師に門脇、副主任講師に金谷、古村、本学生涯学習研究センター専任教官の内田を選出し、内田副主任講師の専門的アドバイスを受けながら、実施計画の作成や運営を行ってきた。

2. 本道及び本学での社会教育主事講習

北海道での社会教育主事講習は本学5キャンパスが5年に1度担当しているが、そのような担当になったのは1977（昭和52）年度の札幌校からのようであり、岩見沢校はその翌年の78年度に最初の担当を経験した。永年本学に勤務させていただき、何度も担当の機会を与えられた者の1人として、本学及び本道での社会教育主事講習担当の推移について簡単に言及しておきたい。

社会教育主事講習規程が制定されたのが1951（昭和26）年6月であり、その規程に基づいて講習が開始されたのはその年度からである。本道地区では北海道大学が1951年から68年まで13回担当してきたが、69年度は北大が辞退して実施されず、70（昭和45）年度から北海道教育大学が委嘱を受けて実施するようになったようである。函館分校を皮切りに、当初は函館と旭川分校が交互にそれぞれ4回と3回ずつ担当し、77年度の札幌分校から5分校持ち回りとなり、以後、札幌校6回、岩見沢校6回、釧路校が2004（平成16）年度予定を含めて6回担当し、2分校担当時代を含めて函館校が9回、旭川校が8回担当してきたことになる。即ち、本学全体では2003年度の岩見沢校担当まで、34回（年間）社会教育主事講習を担当してきたことになる。本学が担当した講習の成果については、各年度「社会主事講習研究集録」等の名称で、グループワークや個人研究の成果が、講習計画や受講生名簿等を含めて集録されており、本道の社会教育主事講習の歴史を研究する資料であるとともに、本道各地の社会教育の施策や実践の歴史を知る上でも貴重な資料となり得るであろう。

本講習研究集録の各年度版を分析し活用した社会教育主事講習史や社会教育史に関する研究が出現し活発化することも期待したい。2003年度も、A 4版350頁の研究報告書が受講生の努力で発行されている。

なお、参考のため、道内の社会教育主事講習の年度別担当校（と受講修了者数）について紹介しておく。1951年に全国3大学（北大、新潟大、東京教育大）で開始された社会教育主事講習は、52年に8大学、53年11大学と増加するが、54年5大学、55年5大学、56年3大学、57年1大学と50年代後半から減少し、また、60年前後から再び増加していく。北海道大学も1955～59年度に中断していた講習を60年度に再開しているが、その背景には、その前年度の社会教育法改正により、都道府県教委に加えて市町村教育委員会にも社会教育主事が必置制になり、社会教育主事講習再開への強い要請に対応したのであろう。（1951-69年は「社会教育事典」第一法規.1971より、1970-2003年は「社会教育主事講習研究報告」北海道教育大学各年度版より筆者が作成）。

1951年度	北海道大学教育学部（39人）	1980年度	同	旭川（67人）
52年度	同上（29人）	81年度	同	函館（79人）
53年度	同上（31人）	82年度	同	札幌（72人）
54年度	同上（32人）	83年度	同	岩見沢（69人）
55～59年度	道内では実施されず	84年度	同	釧路（53人）
60年度	北海道大学教育学部（89人）	85年度	同	旭川（82人）
61年度	同上（82人）	86年度	同	函館（80人）
62年度	同上（50人）	87年度	同	岩見沢（47人）
63年度	同上（66人）	88年度	同	札幌（56人）
64年度	同上（56人）	89年度	同	釧路（83人）
65年度	同上（64人）	90年度	同	旭川（79人）
66年度	同上（56人）	91年度	同	函館（67人）
67年度	同上（120人）	92年度	同	札幌（56人）
68年度	同上（100人）	93年度	同	岩見沢（78人）
69年度	道内では実施されず	94年度	同	釧路（63人）
70年度	北海道教育大学函館（99人）	95年度	同	旭川（83人）
71年度	同 旭川（94人）	96年度	同	函館（65人）
72年度	同 函館（87人）	97年度	同	岩見沢（81人）
73年度	同 旭川（90人）	98年度	同	札幌（56人）
74年度	同 函館（83人）	99年度	同	釧路（70人）
75年度	同 旭川（97人）	2000年度	同	旭川（77人）
76年度	同 函館（91人）	01年度	同	函館（69人）
77年度	同 札幌（93人）	02年度	同	札幌（55人）
78年度	同 岩見沢（88人）	03年度	同	岩見沢（53人）
79年度	同 釧路（83人）	04年度	同	釧路校予定

3. 平成15年度の社会教育主事講習の概要と反省

A. 講習の概要

- ・岩見沢校が担当した平成15年度の講習は、以下の日程と会場で行なわれた。

7月24日～7月26日 北海道立青年の家（第1会場）

7月28日～8月8日 北海道教育大学岩見沢校（第2会場）

8月11日～8月15日 国立大雪青年の家（第3会場）

- ・講習科目は「生涯学習概論」2単位（15講30時間）、「社会教育計画」（15講、30時間）

「社会教育演習」2単位(30講60時間)、「社会教育特講」3単位(16講46時間)

- ・受講生：53人(男42、女11)。教員32人、教育委員会職員15人、その他6人。年齢21～46
- B. 成果、反省など(主任講師として、運営委員会に筆者が報告したメモの一部)
- ・学校の夏期休業期間等を配慮し5講目や土曜日にも講義を行うなど過密スケジュールになったが、その分、講習に集中することができたのではないかと。資料収集や個人レポート作成の時間確保は大変だったようだが、ファックスやインターネットなどで資料収集をしたりして、第3会場での発表時間までにはレポートも全員が完成していたようだ。募集時でのレポート作成準備の提示が必要か。
- ・第1会場と第3会場を道立及び国立青年の家での宿泊としたために、経費も安く、相互のコミュニケーションを深めることができ、また宿泊型社会教育施設の体験学習にもなった。初日に宿泊会場で懇親会を持てたことも有意義であった。両施設の関係職員の温かいご配慮ご協力に感謝したい。
- ・センターの内田副主任講師が専門的視野から各講義の細目を立案し、また岩見沢校運営委員会での検討や正副主任講師と道教委との事前協議を積み重ねたので、それぞれの分野にふさわしい講師陣を確保できて充実したカリキュラムになったと思われる。
- ・社会教育演習Ⅱは、岩見沢校若手教官による3種類のユニークな体験学習(山本：冒険活動、能條：ネイチャーゲーム、武田：森づくり体験)を実施でき、それぞれ受講生には好評であった。
- ・演習ⅠとⅢは、個人及びグループレポートの作成・発表準備を中心とし、5グループとも大学と道教委から1名ずつ担当したが、全員が第一会場で宿泊して交流を持てたことはよかった。
- ・演習グループについて第1希望の片寄りが大きかったが、第2希望で調整し、予定通り5グループ編成で実施することができた。講習開始時に提示した原案を受講生が理解と協力してくれた。
- ・生活班と演習グループを別編制にしたが、そのことへの不満は特になく、受講生相互の交流の輪が広がったと思われる。但し前者に関しては、生活班から選出された各委員会活動が中心となり、生活班それ自体はあまり機能していなかったようである。
- ・やむをえない事情であっても欠席した講義については、講義資料や講義記録に基いて学習レポートをそれぞれ提出してもらう旨、最初に指示したためか、結果的には欠席願いは交通事故処理のための1名だけであった。その受講生も指示どおり、レポートを提出した。
- ・大学図書館が期間中に夜間開講や土日開講を実施していたし、社会教育関係文献コーナーも特設されていたので受講生にとって便利であったと思われる。館内所蔵関係文献目録まで作成していただき、岩見沢校図書館の協力に感謝している。
- ・開催要項に生年月日が掲載されていることに違和感を抱いた受講生たちもいたようである。従って、研究報告集録を含めて、生年月日、個人住所等を掲載してきた慣例の見直しが必要と思われる。
- ・講義で社会教育の源流としてのコーヒーハウスの学習をすれば「珈琲学舎岩見沢店」の表記を入れた揃いのユニフォームを作成したり、通学合宿の学習をすれば懇親会を兼ねて岩見沢市近隣の青少年宿泊施設での通学合宿を試みる等、行動力と団結力に富んだ今年の受講生たちであった。
- ・今年は女性受講者が少し増え、また無職や臨職の参加者もあったが、相変わらず少人数であり、子連れ参加を容易にする配慮なども含めて、参加者の幅を拡大するための工夫や条件づくりが募集段階から必要ではないか、との要望があった。

4. 本講習にご協力いただいた関係各位に深く感謝する

(文責：平成15年度主任講師 門脇正俊)